読売俳壇

矢島渚男 選

炎なき家に住みたり餅を焼く　佐野市　高橋すみ子

【評】住宅様式も変わり畳も囲炉裏も消えて、確かにガスの火を除いては炎はない。餅を焼く時改めて、そのことに気がついた。

寒いねと駆け行く君に声をかけ　和泉市　山崎　文恵

【評】寒い朝もいつもと変わらずランニングしている友だちに「寒いね」と声をかける。君だから、友達以上の人なのかな？

AIが武器を造れと迫る冬　浜松市　宮田　久常

【評】正月中に隣国からミサイルが飛んで来るような極限的世界になった。そして防衛対策を急げと、AIが言う。答えをAIに任せてはならないだろう。

合唱に手話も合はせてクリスマス　行方市　佐藤　紘子

開花した梅の小枝に人集ひ　三郷市　村山　邦保

ガザの子も祈りてをらむ冬の星　八幡市　会田重太郎

木枯しやハングル文字の絵馬揺れる　日立市　菊池　風峰

茶碗酒士に置いては薬喰　甲府市　戸沢　茂紀

復元の一乗谷や雪催　東京都　森　一平

今度こそと思ふ投稿しぐれ虹　岡山市　宮下　哲朗

高野ムツオ 選

生きてれば息も白いし目も黒い　土浦市　今泉　準一

【評】「目も黒い」は自分が生きているうちは決して容認しないとの意志表示。腐敗した政治へか、理不尽な戦争へか。激動の世紀を生きてきた人の啖呵のような片言。

軒つらら星の鼻水かもしれぬ　塩尻市　神戸　千寛

【評】鷹羽狩行の「みちのくの星入り氷柱われに呉れよ」のロマンを思いきり卑俗な世界に転換した。しかし、また別趣のロマンが漂う。

ひそひそと炬燵の上に顔二つ　真庭市　小谷　義孝

【評】仲良し二人。ぴったりくっついて顔だけ出して炬燵に並んでいる。二人だけの内緒話をしている最中。切り取り方が巧み。

大波のごと闊歩するロングコート　三木市　阿南不二枝

冬木の芽光弾きて唄ひ出す　柏市　藤嶋　務

改札に雪のにほひの国訛り　東京都　吉村　恵子

結局は母の受け売り大根煮る　名古屋市　平田　秀

慶びはつつましくあれあへのこと　東京都　大武美和子

冬晴や路地の奥まで灯油売　三郷市　吉村　喜子

冬草の踏まれ続けて生きてゐる　八王子市　梅沢　春雄

正木ゆう子 選

陽だまりは友のにほひや裕明忌　北本市　萩原　行博

【評】俳人田中裕明が四五歳で逝って二十年。「大学も葵祭のきのふけふ」は学生の時の作だ。句とともに人柄も希有だった彼には今も熱烈なファンが多い。忌日は十二月三十日。

振り返り合図に備ふ狩の犬　東大阪市　梶田　高清

【評】合図とは「行け！」だろうか、或いは何らかの動作か。逸る気持を抑えて、指示を待つ猟犬。合図があれば、瞬時に全速力で獲物へと走る。

ぱっと咲きあとはひっそり石蕗の花　大竹市　二階堂顕二

【評】石蕗の花の印象はまさにこんなふう。咲き始めこそ鮮やかなのに、やがて其処に在ることに慣れてしまう。花期が長いせいかもしれない。

降り初めは拳のような牡丹雪　新発田市　松田　正信

小指もて雲丹の味見る漁師かな　鹿嶋市　津田　正義

羚羊の濡るる黒眼と出くはしぬ　松戸市　早坂　哲夫

あんな夜は無いだろうもう埋火の　東京都　永井　光子

鉄床のごとき寒気に突き当る　水戸市　大野太加し

毟り取る今日の無念の頬被　岩出市　沢田慎一郎

止む音の美し琉球の冬太鼓　木津川市　島野　秀子

小澤　實 選

音色ごとに寺の名を言ふ除夜の鐘　京都市　吉田　基子

【評】かつての京都の除夜の鐘。同居の祖母が、鐘の音色ごとに「あれは知恩院さん」「今のは黒谷さん」「今度は南禅寺はん」と言い当てていた。深い静寂が奥に広がる。

マッサージチェアが八台避寒宿　栃木県　あらゐひとし

【評】マッサージチェアが八台も並んでいるということは、かなり大規模な避寒宿であるらしい。大浴場の更衣室あたりに並んでいよう。

クリスマスツリーと並び立ち飲みす　宝塚市　広田　祝世

【評】立ち飲み屋で、いつも通りに飲んでいるわけだが、クリスマスツリーと並んでいるというのが、楽しい。まさに聖と俗とが並ぶのだ。

冬の日の点滴の粒輝かす　太田市　阪本　和夫

ウインナー通す竹輪やおでん種　大阪府　池田　寿夫

腸の砂しごき出されてゐる海鼠　松山市　久保　栞

猿曳を猿がひっぱり退場す　名古屋市　可知　豊親

胸を貸すはずが投げられ初稽古　京都市　峰尾　秀之

レノンの忌愛と平和を祈りけり　さいたま市　秋葉　武彦

一升を回し飲みせり新走　佐野市　伊藤　菊治

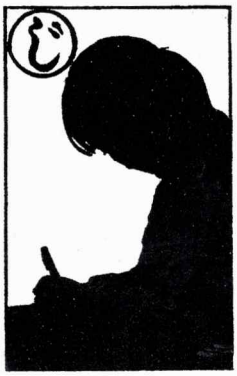
遊ぶ子にどんぐり落とす大きな木　羽生市　岡村　実

【評】大人にとってはカシやクヌギだし、子供にとってはどんぐりの木。でももっと小さい子には単に「大きな木」なのである。大きな木は、下で遊んでいる子供にどんぐりを落とす。気付いて、遊んで、と。ぴし、ぴし。ころ、ころ。戦禍の恐怖に泣く子供の顔をテレビで見ている自分は何なのかと問い続けた年。対極にあるこの句を選ぶ。（正木ゆう子）

年間賞　俳句　②

水筒の水で鎌研ぐ草刈女　横浜市　我妻　幸男

【評】小川などの流れのない場所である。水を汲むことのかなわない環境で草刈りをしているのである。水筒の中の貴重な飲み水を砥石に垂らして、鎌を研いでいるわけである。硬い茎や葉の草が多く、すぐに鎌の刃が鈍ってしまう、たいへんな場所なのだが、刈り尽くすしかないのだ。昨年の長く暑く苦しい夏を思い出させる一句であった。（小澤實）



題字デザイン・イラスト　福田美蘭